

中米の「息子」支援 生きがい

た・か・り・も の

茶色のベストにネクタイ姿の男性、鮮やかな青のドレスをまとった女性の人形。紙やプラスチックのキャップなどを材料に、中米・ホンジュラスに暮らす若者、ホアン・カルロス・マルチネスさんと妻のルイサさんが手作りしたもの。

2012年、現地を訪ねた時に贈られた。自分たちをモデルにしたものと思われ、素朴な出来栄だが、「2人の雰囲気がよく出ている」と話す。これまで世界各国を旅し、現地で男女ペアの人形を集めてきた。中でも、この人形は特に大切にしている。「世界に一つだけですから」と語るまなざしはどこまでも優しい。ホアンさんが息子のような存在だからだ。



ホアンさんと妻から贈られた手作り人形。「我が家のロマン」(2015年)のなかで、ホアンさんと妻のルイサさんが贈った人形。取材：大郷秀爾

やく・みつる 漫画家。1959年、東京都生まれ。81年、「がんばれエガワ君」でデビュー。新聞、雑誌に連載するほか、クイズ番組やワイドショーでも活躍。日本昆虫協会副会長も務める。

ホアンさんとの交流が始まったのは彼が2歳だった1996年。途上国の子どもたちを支援する国際NGO「プラン・インターナショナル」の活動に参加した。地域に対し金銭的な援助をしながら現地の子どもたちと文通するもので、その相手がホアンさんだった。

こうした活動をしようと思っただのは、91年に新婚旅行でホリアを訪ねた時の経験がきっかけ。昆虫好きが高じ、専門誌が企画したアマゾン川の源流域を旅するツアーに夫婦で参加した。宿泊したホテルの近くに貧しい人々が住む地域があり、粗末な小屋のような家で暮らす人々を目の当たりにした。「貧富の差がこんなに大きいとは」とショックを受けた。

帰国後、自分にできることはなにかと考えた。「種端に言えば、漫画家なんてなくてもいい商売なのに、自分はせいたくをさせてもらっている。何かの形でお返ししないといけないと思うだった」

その漫画の力が、文通で太いに発揮された。「自動車整備の仕事がしたい」という夢を語った手紙の返事には、整備士になったホアンさんの姿をイラストにして添えた。「子どもがいない私たち夫婦にとって、我が子を見守るような気持ちでした」

2005年、現地の村を訪ね

て、11歳の彼と初対面した。歓迎の入混みの陰から少年がひょこりと顔を出した。「ああ、ホアンだとすぐ分かりました」12年に再訪した際には、18歳の青年に成長したホアンさんは結婚し、家庭を持っていた。そこで受け取ったのが、男女ペアの人形だ。子どもの頃からの長い支援への感謝を込めたのだろう。「お礼の気持ちが伝わってきて、とにかくうれしかった」と振り返る。



居間に飾ってある人形を見る度にホアンさんの顔が思い浮かぶ。今は父親の農業を手伝っているという。「元気になっているかな」「野菜は売れているだろうか」――。

ホンジュラスという国に対する思い入れも強くなった。「サッカーのホンジュラス代表チームが来日した時は、日本代表よりも応援していました」と打ち明ける。

使命感で始めた支援活動は、いつしか自分の生きがいや楽しみに変わっていることに気づいた。「遠く離れた国の人々と、手紙をやり取りするだけでもまねな体験。こうしてつながりを持たないことに不思議なえにしを感じた」

支援活動は継続中。今はホアンさんと同じ村に住む少女と文通している。「ホアンがどうしているか、彼女の様子を聞いてみます」と目を輝かせた。

くらし 家庭